

学校における特別支援教育をテーマとした 校内研修会の充実を図る —校内研修受講者を対象とした事後アンケートをもとに—

益田 亜矢子

1. 問題と目的

1-1. A県B市の学校における特別支援教育の充実に向けて

報告者の勤務するA県B市の学校では、近年、若手の教職員が増加している。とりわけ、中規模以上の学校では、新卒から数年以内の教職員が学年に1～2名ずついる現状である。一方、2000年代初頭に続いた採用難の時代の影響を受け、中堅層の教職員は少なくなっている。このため、多様な子どもに初めて関わる教職員が多く、経験を伝えられる教職員が少ないという実情は、どの学校でも起こりうることでありと考えられる。

1-2. 報告者の立場

報告者は、B市教育委員会に在籍する巡回指導職員で、公認心理師の資格を有している。巡回指導職員の職務には、B市内公立学校からの要請に応じた校内研修会の講師となることも含まれている。公認心理師法（2015）による公認心理師の定義のうち、第二条「三 心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導、その他の援助を行うこと」「四 心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと」に当てはめると、相談活動と研修を輪環させることで、相談ニーズに応えることが必要である。

1-3. 学校教育をめぐる今日的な課題

1-3-1. 二極化する教職員

図1は、文部科学省（2019a）のデータをもとに、公立小・中・高等学校における教職員の勤務年数別の割合をグラフで表したものである。図1によると、小中学校では、若手層の中でも、1～5年目以内の教職員が最多となっている。次いで、6～10年目の教職員が多いことも、共通している。3番目に多い勤務年数の層は、小学校において11～15年目の中堅層にあたる教職員、中学校において31～35年目のベテラン層である教職員となっている。若手層とベテラン層が多い二極化構造であることが、小学校、中学校の教職員構成の共通点である。一方、高校では、中堅層が少ないのは小学校及び中学校と共通である

が、最多の年齢層は31～35年目のベテラン層となっている。

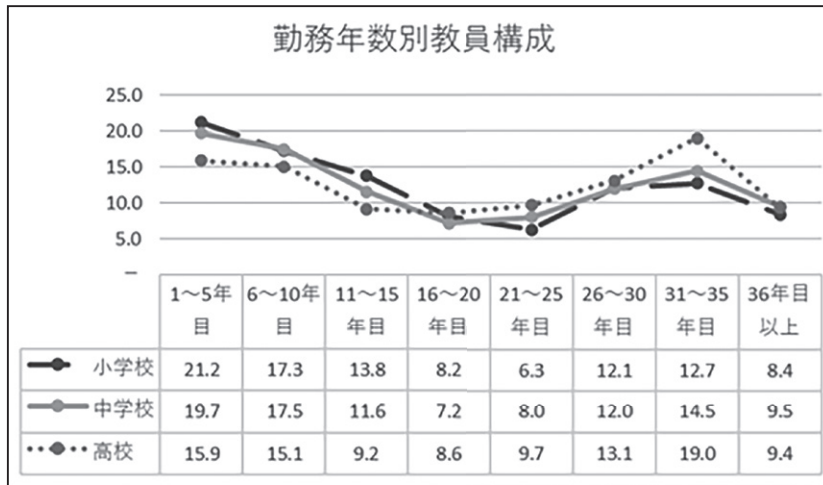


図1：全国の公立小・中・高校における勤務年数別教員構成（文部科学省, 2019aより筆者作成）

1-3-2. 特別支援教育を要する児童生徒の増加

文部科学省（2012）の調査結果によると、通常学級において発達障がいの可能性のある児童生徒の割合は6.5%といわれている。また、文部科学省（2019b）によると、義務教育段階の児童生徒数は減少傾向にある一方、特別支援学校や特別支援学級に在籍する児童生徒数、通級による指導を受けている児童生徒数は増加傾向にあることが明らかになっている。

子どもの多様性や特性・傾向を踏まえ、それらに合った関わり方でできる教職員を育てるためにも、どの学級でも実現可能な特別支援教育の視点を、研修を通じて広めることは急務の課題である。

1-4. 本年度特有の問題

新型コロナウイルスの影響で、感染拡大の予防や授業時数の確保の観点から、例年通りの研修の実施が困難な状況であった。このため、校外で実施される研修会が中止・延期や資料の配付等の代替措置となることが多く、研修の機会が得にくくなっていた。

今回の研修会においても、実施校（B市立C小学校）と協力して、可能な限りの三密回避、換気が可能な会場の設定など、新型コロナウイルス対策をおこなった。

2. 校内研修会の概要

校内からの「特別支援教育について、教職員一丸となってもう一度学びたい」「この数年間で、若手の教職員が増えたので、特別支援教育の基礎的な部分や、日頃の関わりを取

り入れやすいことを中心に話をしてほしい」「本校で巡回指導職員が参観した事例に基づいた話が聞きたい」というニーズに基づき、「通常学級における特別支援教育」「ユニバーサルデザインを活かした授業づくり」について、B市教育委員会特別支援教育担当の指導主事が約40分間、「参観事例から考える支援の手立て」について巡回指導職員（報告者）が約20分間で対面による研修会を実施した。

3. 方法

3-1. 調査対象

校内研修会を受講した教職員のうち、23名分（男性7名、女性16名）のアンケート用紙が返送された。著しい不備は見られなかったため、23名分すべてを分析の対象とした。

3-2. 手続き

2020年12月9日に実施された校内研修会にて、質問紙（無記名式）と一括返送用の封筒を配布し、「期日までに回答し、校内で一括してB市教育委員会（特別支援教育担当の指導主事）へ返送して下さい」と依頼し、12月15日の事務書類交換便で回収をおこなった。

3-3. 調査項目

調査項目は、校内研修について、受講者がどのような感想を抱いたか客観的な回答を得るため、カーク・パトリックの4段階評価の観点から、「研修の満足度」「研修の理解度」「受講者の知識の深度」「受講者の関心度」について構成した。

回答は、4段階（1「そう思わない」、2「どちらかと言うとそう思わない」、3「どちらかと言うとそう思う」、4「そう思う」）で求めた。

また、質問・意見・感想については、自由記述による回答を求めた。

4. 結果

4-1. 回答者のプロフィール

回答者集団（N＝23：男性7名、女性16名）を、文部科学省（2019a）及びA県教職員研修体系の区分に倣い、実務経験年数に基づいてグループ分けすると、若手層（1～10年目）が13名、中堅層（11～20年目）が4名、ベテラン層（21年目以上）が6名となった。回答者集団において、若手層が最多であり、ベテラン層初期に当たる、実務経験年数21～25年目の教職員はいなかった（表1）。

なお、全国の公立小学校における教職員の勤務年数の割合（文部科学省、2019a）とB市立C小学校におけるアンケート回答者の勤務年数の割合を重ねてみると、図2のように

なった。このことから、C小学校の教職員の勤務年数の割合の傾向として、①若手層の中でも、1～5年目以内の教職員が突出して多いこと、②若手層とベテラン層が多く、中堅層が少ないこと、③中堅層とベテラン層の架け橋となる層が特に少ないことが挙げられる。

表1：教職経験年数（実務経験年数）別の割合

		人数（人）	教職経験年数 ごとの割合（%）	層ごとの割合 （%）
若手層	1～5年目	11	47.8	56.5
	6～10年目	2	8.7	
中堅層	11～15年目	3	13.0	17.4
	16～20年目	1	4.3	
ベテラン層	26～30年目	2	8.7	26.1
	31～35年目	3	13.0	
	36年目以上	1	4.3	
合計		23	100.0	100.0

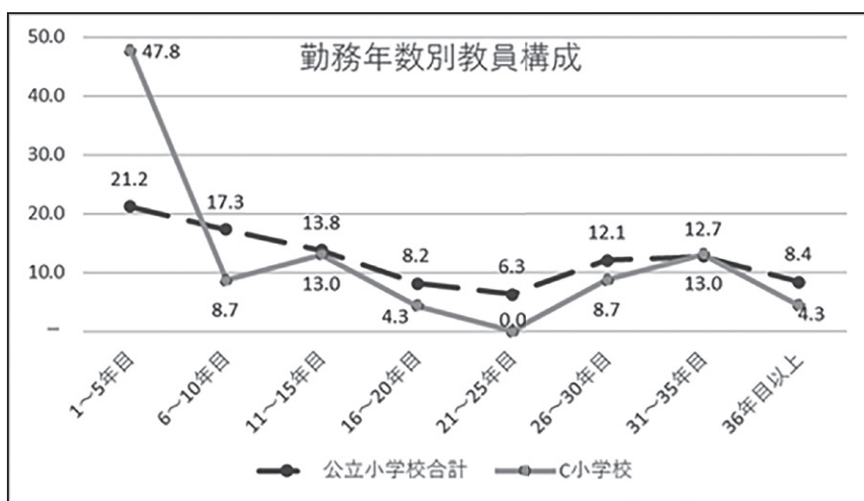


図2：勤務年数別教員構成の比較（文部科学省（2019a）及び研修時アンケートより報告者作成）

次に、担任経験についての質問項目を見てみると、「通常学級のみ担任経験あり」と答えた教職員が最も多く、17名（74.0%）であった。特別支援学級の担任経験がある教職員は、「特別支援学級（通級指導教室を含む）の担任経験あり」または「通常学級のみ」または「通常学級と特別支援学級の両方」と

表2：担任経験の有無

	人数(人)	割合 (%)
通常学級の担任経験あり	17	73.9
特別支援学級（通級指導教室を含む）の担任経験あり	3	13.0
通常学級・特別支援学級とも担任経験なし	3	13.0
合計	23	100.0

回答した教職員を合わせても3名（13.0%）であった。養護教諭、学級補助職員など、職務の特性上「学級担任の経験なし」と回答した教職員も3名（13.0%）であった（表2）。

実務経験のある学校種については、「小学校のみ」と回答した教職員が最も多く、18名（78.3%）であった。次いで「小学校を含む2校種」が4名（17.4%）、「小学校を含む3校種」が1名（4.3%）であった。特別支援学校での実務経験のある教職員は、回答者の中にいなかった（表3）。

表3：実務経験のある学校種

	人数（人）	割合（%）
小学校のみ	18	78.3%
小学校を含む2校種	4	17.4%
小学校を含む3校種	1	4.3%
合計	23	100.0%

4-2. 研修会の感想についての分析

4-2-1. 職務経験層による比較

職務経験層（若手層、中堅層、ベテラン層）に着目して、研修会についての感想をカイ二乗検定を用いて分析したところ、(1)「研修の内容は、わかりやすかった」($X^2 = 17.90$, $df = 4$, $p < .01$), (2)「研修の内容は、自身の知識を整理するのに役立った」($X^2 = 9.70$, $df = 4$, $p < .05$), (3)「研修を通じて、新しい知識を得ることができた」($X^2 = 12.69$, $df = 6$, $p < .05$), (4)「研修の内容は、興味深かった」($X^2 = 10.61$, $df = 4$, $p < .05$)において、若手層 > ベテラン層 > 中堅層の順に満足度や理解度が高いという、職務経験層による有意差がみられた。一方、(5)「事例の内容は、関わっている子どもたちの様子をイメージしやすかった」($X^2 = 9.78$, $df = 6$, $n.s.$)においては、全体の87.0%で「とてもそう思う」または「どちらかと言えばそう思う」の回答を得たが、職務経験層による有意差はみられなかった。

4-2-2. 担任経験による比較

担任経験の有無（通常学級の担任経験あり、特別支援学級の担任経験あり、学級担任の経験なし）に着目して、研修会についての感想を、カイ二乗検定を用いて分析したところ、(1)「研修の内容は、わかりやすかった」($X^2 = 12.0$, $df = 4$, $p < .05$)において、得点の高低が、担任経験の違いに影響を受けることが明らかになった。(2)「研修の内容は、自身の知識を整理するのに役立った」($X^2 = 5.3$, $df = 6$, $n.s.$)と、(3)「研修を通じて、新しい知識を得ることができた」($X^2 = 6.8$, $df = 6$, $n.s.$), 及び(4)「研修の内容は、興味深かった」($X^2 = 4.6$, $df = 4$, $n.s.$)においては、担任経験による有意差はみられなかった。このことから、研修の満足度及び関心度の一部項目は、担任経験の違いに影響されないことが明らかになった。(5)「事例の内容は、関わっている子どもたちの様子をイメージしやすかった」($X^2 = 12.7$, $df = 6$, $p < .05$)において、通常学級の担任経験者において「そう思う」と答えた割合が有意に高かった。

4-2-3. 自由記述回答の分析

研修会に対する質問・意見・感想を自由記述で求めたところ、19名から56文の回答を得た。得られた回答は、作井・山内(2020)の手法に倣い、KH Coderを用いた頻度抽出をおこなった。

挙げられたコメントを語数の頻度別に列挙し、頻度が3回以上の語句を抽出したものが表4である。とりわけ、「子・子ども・児童(31)」「思う(19)」「ありがとう(13)」「支援(12)」「考える(9)」といった言葉が上位に位置しており、「子どものことを考えた手立ての検討」「教職員として、どのような意識をもったのか」「今後、取り組みたいと感じたこと」「研修会への謝意」が要約できた。

次に、挙げられた語句を品詞別に分類し、出現頻度が上位5位以内の語句を抽出したものが表5である。表4で挙げた語句の他は、研修会の内容の核心を示す「支援(12)」「授業(8)」「具体的(8)」「ユニバーサルデザイン(化)・UD(化)(7)」のほか、「思う(19)」「考える(9)」などの動詞や、「今後(4)」「とても(3)」「改めて(2)」などの副詞も挙げられた。ここから、「自身の授業や、子どもへの支援を振り返っての反省や課題」「ユニバーサルデザイン(化)への取り組みに向けた抱負」「事例を通じて考えたこと」「既存のシステムに対する疑問や問題提起」「次回の研修への要望やニーズ」が要約できた。

表4

抽出語	出現回数
子、子ども、児童	31
思う	19
ありがとう	13
支援	12
考える	9
具体的	8
困る	8
授業	8
ユニバーサルデザイン(化), UD(化)	7
本日	7
聞く	6
お話	5
意識	5
研修	5
担任	5
今後	4
指示	4
事例	4
対応	4
必要	4
引く	3
学習	3
感じる	3
教員	3
言葉	3
行動	3
今回	3
指導	3
取り組む	3
書く	3
生活	3
声	3
多い	3
特別	3
反省	3
板書	3
変える	3
方法	3
良い	3

表5

名詞		サ変名詞		形容動詞		副詞可能	
子・子ども・児童	31	支援	12	必要	4	本日	7
具体的	8	授業	8	特別	3	今後	4
ユニバーサルデザイン（化）・UD（化）	7	お話	6	貴重	2	今回	3
事例	4	意識	5	雑	2	一斉	2
自分	4	研修	5	多様	2	時間	2
動詞		形容詞		副詞		感動詞	
思う	19	多い	3	とても	3	ありがとう	13
考える	9	良い	3	かなり	2		
困る	8	嬉しい	1	こう	2		
聞く	6	少ない	1	改めて	2		
引く	3	忙しい	1	もう一度	1		

5. 考察

回答内容より、校内研修は、教職員が、日頃の実践を振り返りながら知識を整理したり、新たな知見を自身の実践に反映させたりする契機となっているという可能性が示唆された。

併せて、通常学級での参観事例の共通性をもとに、研修会で呈示する事例を作成したことも、「事例の内容は、関わっている子どもの様子をイメージしやすかった」という回答の高さに結びついたものと考えられた。

教職員の感想より、「自身の実践を振り返るきっかけになった」「配慮を要する子どもに、どのように関わったら良いかの指針になる事柄を知ることができた」「参観事例を基にした内容で、日頃関わっている子どもたちを思い浮かべやすかった」という声が多かった一方、中堅層を中心に、「実践や教材についてもっと知りたい」「より専門的・具体的な内容を知りたい」という感想や、「気になる子どもについて、どのような配慮をしたら良いか、相談できる時間があると良かった」という感想も見受けられたので、今後は、これまでの研修で扱った事柄の振り返りと最新の事情や、より進んだ段階の内容を交えた研修の充実、気になる事案についての相談を受ける機会の設定が必要であると考えられた。

6. 参考・引用文献

A県教育委員会, 2019, A県教職員研修体系

厚生労働省, 2015, 公認心理師法

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80ab4905&dataType=0&pageNo=1（閲覧日：

2020年12月30日)

文部科学省, 2012, 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/fieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf (閲覧日: 2020年12月29日)

文部科学省, 2019a, 学校教員統計調査

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400003&tstat=000001016172> (閲覧日: 2020年12月29日)

文部科学省, 2019b, 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議, 資料3-1, 日本の特別支援教育の状況について

https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/2019/09/_icsFiles/fieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf (閲覧日: 2020年12月29日)

榊原康夫, 石山晃司, 宮前貢, 2010, 福島大学総合教育研究センター紀要, 9, 9-16, 「授業づくり」についての校内研究支援の実際～大東中学校の校内研究の例から～

作井恵子, 山内啓子, 2020, 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 1, 165-177, 外国語教科教科化に対する小学校教員の意識調査: 第2言語習得からの示唆

山元薫 2016, 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇, 66, 93-105, 県内の知的障害特別支援学校研修課長が抱く校内研修に関する意識調査

山元薫, 小岱和代, 2020, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 30, 10-17, 研修課長が抱く校内研修に関する意識調査Ⅱ: 知的障害特別支援学校を対象とした質問紙調査から

2. 次に、研修会の内容についてお伺いします。質問に対して、右の欄の1～4のうち、当てはまる回答を1つ選んで○をつけてください。

	そう 思わ ない	ど ち ら か と 言 う と そ う 思 わ ない	ど ち ら か と 言 う と そ う 思 う	そ う 思 う
(1) 研修の内容は、わかりやすかった。	1	2	3	4
(2) 研修の内容は、自身の知識を整理するのに役立った。	1	2	3	4
(3) 研修を通じて、新しい知識を得ることができた。	1	2	3	4
(4) 研修の内容は、興味深かった。	1	2	3	4
(5) 事例の内容は、関わっている子どもたちの様子をイメージしやすかった。	1	2	3	4

3. 最後に、本日の研修会について、ご意見・ご質問・ご感想など、ご自由にお書きください。次回以降の研修会の手がかりにさせていただきます。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。